

アートテーブル大賞



「Bamboo Table “King”」

村上素子＋山本想太郎

伝統技法によって竹を加工し編み上げたかごと、それを設置する受け台で構成されたテーブルです。かごに食べ物などを入れて持ち運び、受け台にはめ込むことでテーブルを完成させるという動作を通して、人と物が協力し合って機能するような関係性をつくることを試みました。かごの素材であるスズタケのなめらかな手触りが優しく自然を感じさせ、屋内外のどのような場所でも、ピクニックをしているかのような感覚を呼び起こします。

村上素子:すず竹細工 つくり手。兵庫県生まれ。民族文化の調査・記録にたずさわる。2011-19 東京大学大学院博士課程。2020- 竹細工作家として活動。展示会等に出品。博士(農学)。

山本想太郎:建築家。東京都生まれ。1989-91 早稲田大学大学院。1991-2003 坂倉建築研究所勤務。2004- 山本想太郎設計アトリエ主宰。一級建築士。東洋大学・工学院大学・芝浦工業大学非常勤講師。オーストラリア建築家協会賞、AACA賞、東京建築賞、グッドデザイン賞などを受賞。

審査員賞

加茂紀和子賞 (みかんぐみ共同代表、名古屋工業大学教授)



「さまよう看板」

似て非 works (稲吉稔)

これは元々昭和のビルの看板が役割を終えて、町中をさまようテーブルとして変換されました。町の中にふと現れる元看板(縦を横に)が「場」を作り、有るモノから無いコトを作る「様」となります。天板の素材は元ガラスの天板を砕きエポキシ樹脂で再生され、名も無い元看板として町をさまよい続けます。

似て非 works :「似て非 works」は似ている様で異なると云う意味を基に「元何か」が異なるフィルターを透して、予想外が如何に連鎖を生むか?を試みています。移り変わる日常の中の“元何か”これまで活動拠点としてきた場所も、元お菓子工場や、銀行跡、元運送屋さん、その対象は全て町の中にありました。例えば普段は眠っている、自由で豊かな創造性は誰にもあり、その対象は、小さなモノやコトから始まり、記憶を重ねる町そのものなのかも知れません。

木村絵理子賞 (横浜美術館主任学芸員)



「わになる」

tre

横浜の街の中。人々が過ぎゆく道端の、なんてことない木や街灯。誰かが考えてつくってくれたはずのモノたちに、ふと目を向けなおす瞬間をつくりたい。まんなか穴が空いたテーブルで、モノたちを囲う。天板の上にひょこっと顔をだしたモノたちは、街の風景のひとつから、ひとりの登場人物として見え方が変わってくる。

tre: 奥川司(多摩美術大学B1)、河野七穂(多摩美術大学B2)、竹内佑有(東京藝術大学B1)、によるトリオ。美術予備校で浪人時代を共にすごし、大学進学後に共同制作のためのグループを結成。

寒川紗代子賞 (資生堂クリエイティブ株式会社アートディレクター)



「IKADA (筏テーブル)」

日高仁

筏—材木をまとめて運び、解体して部材として利用する日本古来の技術
街のスケールが大きく、ある程度の大きさと同時にローコスト性も求められた。そこで樹種やサイズが異なる古材を組み合わせて再生利用を行うこととし、筏のように束ねてテーブルという一つの機能を持たせた。厚みの違う材を方向も変えながら使うことで撓みを抑えている。状況に応じてサイズや形態も変更できるシステム。展示終了後は解体し、古材としてリユースする。

日高仁:1971年広島生まれ。建築家、SLOWMEDIA代表。東京大学大学院、磯崎新アトリエ、東京大学特任助教を経て関東学院大学共生デザイン学科准教授。Responsive Environment 共同主宰。作品に Soft Architecture@1929 (2006,2007) Media Scape @ Yokohama(2009,2010)等。受賞歴に、しまなみ海道10th アニバーサリーコンペー席、神奈川県建築士会 感境建築コンペ2019最優秀賞、第3回JIA 四国建築賞2018佳作等。

松本道雄賞 (高島中央公園愛護会会長)



「足と脚 -Rickshaw Table-」

しんきんぐ

テーブルには2本の脚しかついていない。表現者である“キング”が自ら3本目の脚となることで初めてテーブルとして成り立つ。キングはテーブルの一部となりながら、場をつくっていく。人間が部品であるからこそ、“交流”もこのテーブルの機能になる。キングは目印となる王冠を被り、テーブルの脚となり、利用者 と交流する。王冠の受け渡し、キングの交代によって利用者を表現者側へと巻き込んでいく。

しんきんぐ:Bankart School で集まった大学院生5人によるチーム
鈴木亮太 関東学院大学助手 横浜市立大学 D3
沼尾航平 横浜市立大学 M2
中村元 横浜市立大学 M1
岩屋百花 横浜市立大学 M1
川田真史 横浜国立大学 M1

キング軸界限賞

オーディエンス賞

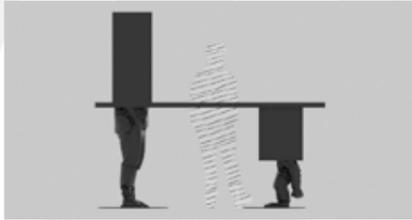


「UMIKAZE YOKOHAMA」

TOMOKO

大栈橋から眺める海の景色は表情と色彩を変えて私たちの目前に大きな腕を広げている。ART TABLE “UMIKAZE YOKOHAMA”は深い海のグラデーションで横浜の海を表現。波を描くフォルムは柔らかく海面の美しさを、そして集う人々が潮風に包まれ微笑む光景をイメージしました。

TOMOKO (内井知子):東京目黒で生まれる。3歳から横浜で育つ。1974年からモデル業をスタート。資生堂専属モデルとなったほか、日本初の話題の企業のコマースナルや雑誌などに数多く出演する。モデル業を経て外資系企業のハイブランドの立ち上げに携わる。その後、店舗やブランドのイメージディレクションやビジュアルディレクションなどを手掛ける。現在はアルフォンス・ミュシャ日本総代理店としてライセンシング展開を運営する株式会社ジーイーエム代表取締役。



「Wa! t a Table!」

WA!moto.+ Islands.co

彫刻家WA!moto.の作品「MC」をデザイナーの高平洋平がアートテーブルにしました。WA!moto.こと渡辺元佳自身とWA!moto.のシグネチャーとも言えるチンパンジーが、下半身は3Dスキャン、上半身は抽象化されたモノリスというユーモラスな意匠のテーブルになりました。必要としている人の所へと駆けつけ、作業中にはしっかりと支えてくれるような、動と静を併せ持つ頼もしいテーブルへと高平洋平がデザインしました。子供から大人まで、目的の違う多様な人々の行き交う「道」の中でも存在感を示すことでしょ。

WA!moto.+ Islands.co

渡辺元佳:1981年北海道伊達市出身。言語、文化を超えたコミュニケーションをテーマに、動物をモチーフとした彫刻作品を約20年間制作、発表。近年では、中国中山市、Find our Happiness.(2021)など。

高平洋平:インテリアデザイナー/桑沢デザイン研究所専任講師。内田デザイン研究所に在籍し内田繁に師事(2011-2020)。ホテルやレジデンスのインテリアデザイン、展覧会場構成、家具設計等を手がける。



「旅するコンポストテーブル-hacorin-」

株式会社EAU・中尾直暉

はこりんは、都市に土をはこぶコンポストテーブルです。このテーブルが可能にするのは、公共スペースに一時的な食卓を用意し、食べ残しをその場で土に混ぜるという新しい食事スタイルです。食べ物は土から生まれて土へ還ることを実感し、より美味しく「たべる」ことができます。また、誰かの生ごみをたい肥化してあげたり、できた堆肥を誰かにあげたりすることで、コンポストのネットワークを都市に広がっていくことができます。

中尾直暉:1997年生まれ。長崎県の佐世保市で、山と海に囲まれて育つ。現代の社会が生態系を乱しながら街をつくっていることに疑問を覚え、環境デザイナーを志望した。2022年、早稲田大学大学院 吉村靖孝研究室を卒業。現在は、公共空間のデザインを専門とする設計事務所、株式会社EAUに所属。人間を含めたあらゆる生命が共生する環境をつくるべく、プロダクト・建築・土木の領域を超えて設計を行っている。



「手しゃべりテーブル キング軸」

Mijin○△□

手が生む○△□の色と布・手を介して出会うテーブル。お散歩や通勤で利用する「キング軸」で、小さいけれども新しい横浜の「こと」がこのテーブルから始まります。布にはプラスナップを使用し、留めたり外したり重ねたり、誰もが簡単に行えそうで、ちょっぴり悩み考える事も。テーブルで出会った人と、もちろん1人でも、○△□の布からここで生まれる出来事が「かたち」になります。

Mijin○△□:東京藝術大学の社会人履修プロジェクト「Diversity on the Arts Project」(愛称:DOOR)で出会い生まれました。2017年より福祉・美術・まちづくりの現場で「ひと・ことを知る」きっかけ創りとしてワークショップを重ねる毎に、メンバーを入れ替えるなど、現場や地域で関わる人と共に成長中のプロジェクトグループです。

「MIKAN TABLE 2022」

みかんぐみ

横浜トリエンナーレ2005において、移動式のFMラジオ局とチケットブースおよびカウンターとしてデザイン・制作した「MIKAN TABLE」を「MIKAN TABLE 2022」として制作しました。当時、全ての会場において案内サインとしてヨコハマカラーであるブルーの工事用三角コーンが用いられました。同じブルーの三角コーン(高さ約70cm)をテーブルの脚に見立て、密集林立させ、その上に天板をのせてテーブルとしても活用しました。三角コーンのサイズ・色・配列と天板の形状の組み合わせにより、無限のパリエーションがうまれます。「MIKAN TABLE 2022」ではカラフルな三角コーンを用いて多様性を表現しています。

みかんぐみ:加茂紀和子、曾我部昌史、竹内昌義、マニュエル・タルディッツによる一級建築設計事務所。1995年NHK長野放送会館の設計を機に共同設立。戸建住宅から、保育園、学校、商業施設や万博パビリオンなどの建築設計を中心に、家具、プロダクトやアートプロジェクトまで幅



MIKAN TABLE 2005

広くデザインを手がけている。主な作品:NHK長野放送会館、SHIBUYA-AX、2005年愛・地球博トヨタグループ館、伊那市立伊那東小学校、横浜開国・開港博Y150はじまりの森、mA Ach ecute 神田万世橋、横浜市立みなとみらい本町小学校 <https://mikan.co.jp/>

「キングテーブル」

ヤング荘

キングのテーブル。

ヤング荘:グラフィックデザインと現代美術を横断する作品制作を展開。チラシ、カタログデザインの仕事の他に、展覧会などで作品を発表している。



アートテーブルでの飲食は、キング軸周辺の店舗からのテイクアウトを利用することができます。資生堂S/PARK Cefe、ドトールコーヒーショップ横濱ゲートタワー店など。